

阪神教育闘争犠牲者・朴柱範さんの遺族と 解放前の「本庄村」(現神戸市東灘区)を訪ねる

今年1998年は「阪神教育闘争」の50周年にあたる。50年前の「4月24日」に最大の山場を迎えたので「4・24阪神教育闘争」とも言われている。

1945年8月15日の敗戦(解放)以降、日本全国で在日朝鮮人の自主学校が作られた。その学校にGHQが圧力を加え、それをはねかえすために全国的に闘われた運動の中で最大のものが「阪神教育闘争」である。大阪では金太一少年が射殺され、兵庫では当時朝連兵庫県本部委員長の朴柱範さんが、1949年11月25日、病気によって仮出獄した4時間後に死亡した。「獄死」に等しいものだ。

その朴柱範さんの遺族が94年4月の「長田マダン」がきっかけで韓国におられることがわかり、50周年の今年、招請が実現したのである。(『むくげ通信』165号、飛田訪問記参照)

今回、「阪神教育闘争50周年記念神戸集会実行委員会(代表、徐根植・飛田雄一)」が招請した遺族は4名。記念シンポジウムは去る4月23日、神戸学生青年センターで開催され、記念講演(金慶海氏)や体験者・遺族の証言が行われた。

遺族は25日の大阪集会にも参加され忙しいスケジュールだったが、神戸集会の翌日24日には、せめて一日観光をと、できたばかりの明石架橋を通過して四国鳴門までご案内した。戦前の神戸しか知らない遺族たちはみんな喜んでくださった。夕方、宿舎の神戸学生青年センターにもどるとき、戦前に父親の朴柱範さんと生活した本庄村(現神戸市東灘区)のことになると、皆が懐かしそうに話される。そして、やはり行ってみよう、ということになった。



神戸集会で証言する朴再禧さんと通訳の金慶海氏

最初に行ったのは国道2号線北、神戸市の東の端にある森市場のところである。現在森市場は、5階建?のショッピングセンターになって当時の面影はない。しかし、2号線をはさんで南側の小さな医院の場所をさしてここに住んでいたという。朴柱範さんは、戦前には雑貨商や飯場を行いながら、基督教の集會を主宰されたり、村会議員(1937年と42年に当選)、阪神消費組合幹部としても活躍された方である。その医院の場所でも2階で基督教集會をしていたという。

車でその辺りを回りながら次に訪ねたのが阪神青木駅である。駅の南東には当時のままに小さな神社と公園があった。その神社から更に東に150メートルほど行ったところで、「ここに長いこと住んでいて消費組合の仕事も基督教集會もしていた」と大感激だった。この地域は先の阪神大震災で被害の大きかったところでほとんどの家が新築されていたが、その場所は確定することができたのである。(飛田)

※『忘れまい4・24—阪神教育闘争50周年記念誌』(B5版、32頁、400円、希望者は送料ともで560円を80円切手7枚でむくげの会までお送り下さい。)